

# 全国看護学生作文コンクール

## 審査員特別賞

よしい **吉井** みく **美空**

### 行動の意味を考えること

介護老人保健施設での実習初日、利用者さんと一緒にお話しさせていただいていた時のことだった。パシッという音がし、そちらへ目をやると、ある認知症の利用者A氏が険しい顔つきでほかの利用者さんの頭を叩いたようだった。幸い、ほかの看護師さんがその現場を見てくださっていたことや、その利用者さんにもけがはなかったことで、その件は大ごとになることはなく、その場限りの事態に終わった。大ごとにならなかったことに安堵した私に、一緒に話していた利用者さんは、「あの人は、よく、勝手に人の部屋に入ったりして職員さんを困らせているのよ。いつも険しい顔をしているし、怖い人ね。」と教えてくださった。私は、A氏のことが気になり、カルテを見ると、A氏は、ほかの利用者さんに暴力をふるったり、執着したりといった行動があるようだった。

実習2日目、やはり眉間にしわを寄せ、怖い顔をしてA氏は1人自分の席に腰かけていた。声をかけようか迷いながら「Aさん、今お話しさせてもらってもいいですか？」と声をかけると、A氏は少し驚いたような顔をした。しかし、昨日の様子からは想像もできないほど優しい声で「いいよ。」と答えてくださり、家で飼っている猫のこと、自慢の息子がいること、生き物が好きなことをたくさん話して聞かせてくださった。そして、ある介護士さんを指さし「あの人はね、いつもここをきれいにしてくれるとてもいい人なのよ。あの人のことは覚えられたの。でも、私は人のこと覚えられないし、ここがどこかわからない。簡単なこともできなくていつも迷惑かけてばかり。たぶん、明日、あなたのことも忘れてしまう。ごめんね。」と涙を流しながら話してくださった。私は「いいですよ。覚えてくれようとするAさんの気持ちだけで私は嬉しいです。」とA氏の背をさすりながら声をかけると、A氏は「話を聞いてくれてありがとう。あなたのことは忘れたくないわ。」と少し笑って答えた。怖いと思っていたA氏は、本当はとてもやさしい人なのだとわかり、私はカンファレンスで今日あったことを話し、昨日の暴力も、ほかの利用者さんに対する執着も、ここがどこかわからない不安や、知らない人ばかりに囲まれた生活への寂しさからきていたのではないかとことを看護師さんに伝えた。

実習3日目、Aさんの席はその施設の中でも、会話の多いにぎやかな席に変わっていた。昨日までの険しそうな顔が一変、にこにこしたA氏の顔を見て私は安堵したとともに、楽し気に笑うA氏の顔がともうれしかった。A氏に声をかけると「昨日話した子よね。」と声をかけてくださり、A氏を含めたその席に座る方々と和気あいあいとお話しさせていただいた。

この経験は、患者さんの行動の裏にある思いを知ることの大切さを教えてくれた。患者さんの話にゆっくり耳を傾け、患者さんの思いに気づいて援助できる看護師になりたいと思う。

## 最優秀賞

かわぐち **川口** かなえ **奏恵**

### 触れること

学生最後の実習、私は膵臓がんの末期のAさんを受け持たせていただいた。Aさんは日に日に弱っていく自分の身体と強い癌性疼痛に苦しんでいた。受け持ち初日、患者さんのもとへ挨拶に行くところには痛みを苦しむAさんの姿があった。自己紹介をし、よろしくお願ひしますと言っても痛みをせいか顔をゆがめながらうなずくだけであった。受け持ち初日であり、私は情報収集をしなければならないという使命感もあり何度かAさんのもとへ訪室するが、痛みで苦しんでいるか疲れて寝ているかでコミュニケーションがとれず、他の学生が患者さんとの関わりを増やしている中、私は焦りを感じていた。家に帰ってから癌性疼痛とその治療薬、カルテから収集したAさんの痛みの変化の情報をもとに、どうしたらAさんが少しでも楽になるか考えた。Aさんの痛みには日内変動があり午後の方が痛みの程度が少ないことが分かり、次の日私は午後を中心にAさんのもとへ行き、コミュニケーションを取りに行った。やはり午後に痛みが和らぐようだが疼痛が完全になくなることはなく、Aさんと話している最中にも「いてて」と顔をゆがめることがあった。私は痛みを訴える背部を触った。するとAさんは「手あったかいね、なんだか痛みが楽になった気がする」と言った。「良かったです。このままさすりましょうか？」と言うと「お願い」と言い、しばらくさすっているとAさんは眠りについた。

私はこの時、ある出来事を思い出した。それは私が看護師を目指すようになったきっかけである。小学生だった私は初めての手術が不安で当日に泣き出してしまった。そんな時、そばで私の手を握り不安な思いを聴いてくれたのが看護師であった。その時の手の温もりと安心感が私の看護師になりたいと思った原点である。

私は学生と言う立場でAさんの訴えを看護師に伝えることはできても、痛みを取ったり病を治したりすることはできない。そんな私がAさんにできることは何か。次の日もそのまた次の日も私はAさんのもとで背中をさすりながらAさんの思い出話を聞いたり、体調がいい日には足浴をしたりテーブルの位置を変えて一緒に窓の外を眺めたりした。日に日にAさんの笑顔も増えていった。Aさんが緩和ケア病院に転院する日、Aさんは手紙を私にくれた。「あなたがいてくれて良かった。安心できる存在でいてくれてありがとう。」その言葉は今でも心に残っている。

私には病を治すことができない。でも、患者さんのそばで身体に心に寄り添い、安心してもらえ存在になることはできる。私の理想である安心できる看護師になるために、今回の体験を忘れず、一人ひとり患者さんに真剣に向き合っていきたい。

## 第12回全国看護学生作文コンクール 入賞者一覧

各賞	氏名	都道府県	学校名	タイトル
最優秀賞	川口 奏恵	兵庫県	明石医療センター附属看護専門学校	触れること
読売新聞社賞	飯塚 ゆかり	埼玉県	戸田中央看護専門学校	地域を生きるを支える看護
啓明書房賞	有吉 誉樹	福岡県	専門学校麻生看護大学校	マスク越しの看護
医歯薬出版賞	平賀 紫帆	静岡県	静岡市立清水看護専門学校	母からの課題
さわ研究所賞	前野 花乃	鹿児島県	学校法人神村学園 神村学園高等部	心に寄り添う看護
審査員特別賞	吉井 美空	兵庫県	姫路赤十字看護専門学校	行動の意味を考えること

各賞	学校名	都道府県
最優秀団体賞	戸田中央看護専門学校	埼玉県
優秀団体賞	兵庫県立龍野北高等学校	兵庫県
	学校法人大阪滋慶学園 出雲医療看護専門学校	島根県

全国の看護学生さんから2,200作品以上の応募がありました。たくさんの応募をいただきまして、ありがとうございました。また、表彰された皆様、おめでとうございます。なお、「NPO 法人国際看護支援センター」のホームページには、表彰された6作品と、佳作24作品の氏名と学校名を掲載しております。

NPO 法人 国際看護支援センター 全国看護学生作文コンクール実行委員会





## 読売新聞社賞

### 地域を生きるを支える看護

私の育った地元は、人口わずか 12,000 人ほどの小さな町だ。年々過疎化が進み、町内にある病院は、病床 90 床の公立病院ひとつである。その公立病院も、東日本大震災の折に、被災し、新たに建物が再建されるまでに 3 年以上の歳月を要した。

私が看護師を志そうと決めたのは、祖父が亡くなった時の経験がきっかけだった。祖父は胃がんだった。祖父は祖母と二人暮らし。1 か月もの間、便秘が続いていたが、祖父は家にある置き薬の便秘薬を飲むなどし、しばらく我慢をしていたそうだ。祖父の家は、使った薬の分だけ代金を支払う配置販売、いわゆる「置き薬」を利用していた。祖父の家にはいつも薬箱が置いてあり、その中には製薬会社の人が置いていく市販薬や絆創膏など一通りのものが揃っていた。今考えると、すぐ近くに病院が無い地域では、こうした置き薬が一番身近な治療の手段だったのだと思う。私の幼い頃の記憶だが、私の祖父母は、包丁で骨が見えるぐらい指を深く切っても、病院へも行かずは何日も絆創膏と包帯で傷が治るまで辛抱していた。病院に行くと私が言っても笑顔で返すような祖父母。幼い頃は何の疑問も持たなかったが、今思えば、近くに病院が無いというのは大変不便なことだった。

祖父は胃がんの手術のため入院し、手術後にせん妄の症状が現れ、身の回りのことを自力でできなくなった。介護老人福祉施設に入所し、最後は肺炎のため、病院で家族に看取られながら息を引き取った。私は当時仕事をしており、その場に立ち会うことはできなかった。祖父の死をきっかけに、私は祖父のような地域で暮らす高齢者の生活を別の形で手助けできないだろうか、と強く考えるようになった。

当時の私は、仕事の中で高齢者の孤独死や老々介護の場面に遭遇することもしばしばあった。その中には、福祉の介入がいくらでもできたはずなのに、支援を受けていないような家庭もあった。祖父の死後、私は祖父のような地域に住む高齢者を支えるための仕事をしたいと考えるようになり、訪問看護師という職業に興味を持った。孤独死については、老年人口が増えていく中で、度々問題として取り上げられているが、年齢に関わらず孤独死を迎える可能性は誰でも持ち合わせているし、孤独死そのものが良い悪いということではないと思う。ただ、亡くなってから数か月、何年も見つけてもらえないというのはあまりに不憫だと感じる。人の繋がりが希薄な世の中で、訪問看護という形で社会と高齢者を繋ぐ一端を担うことができれば、孤独死を早期発見することに繋がるのではないか。漠然と聞こえるのかもしれないが、私の中では看護師を志す理由としては十分だった。祖父のような、地域に生きる人を支えたい、私の看護を目指す理由がそこにある。

## いつか飯塚 ゆかり

## 啓明書房賞

### マスク越しの看護

うす暗い部屋に一人横になっている女性。窓は閉め切り、痛い痛いとか誰かに助けを求めるように一人で訴え、重たい雰囲気と表現するしかない部屋。白血病を患い、腰の骨に転移して痛みが出現している高齢女性 A さんを受け持つことになった。入院前は一人暮らし。痛みを耐えながら一人で家事を行い、夜間のトイレでは痛みを耐えられず、腕の力で這ってトイレまで行っていたという。

「非言語コミュニケーションは重要です。マスクをした状態でのコミュニケーションは全体の表情が把握できず相手に与える情報が制限されるので困難になります。」これは私が記憶している一年生の時に受けた授業の一部。新型コロナウイルス感染症対策としてマスクをして実習をしないといけない状況で、痛みを訴え続ける A さんとのコミュニケーションに不安しかなかった。受け持ち期間は限られている。できることはないかと焦った。会話も弾まない。マスクがなければうまくいくのにと悔いた。視線も合わせてくれずウトウトしている患者に、ふと私は小声で口ずさんだ。

「そんな時代もあったねと、いつか話せる日が来るわ。」中島みゆきさん「時代」の一節。何気なく口ずさんだが、これが転機となった。A さんは私が歌い終わるや否や驚いた顔でこちらを向き、同時に笑った。その後の会話は今までとはまるで違い、笑顔の会話が続いた。次の日から毎日、私が部屋に来ることを楽しみにしてくれた。好きな歌手について語り、一緒に歌も歌った。気付けば以前に比べて痛みを訴えることはなくなっていた。

あるとき「人との距離ってどう決まると思う？」と私に尋ねた。続けて「長い付き合い？マスクを外した素顔を知っていること？多分それもあるかも知れないね。でも一番大切なのは、楽しい、嬉しい気持ちを分かりあえたときに距離は縮まると思うんだよね。哀しいことも同じ。腰の痛みを自分のことのようにわかってくれてとても嬉しかったよ。」と。私は気付いた。関わる時間が短くても、マスクという「一枚の壁」があっても、同じ時間を過ごし、同じ話題で楽しみ、喜ぶ。そして相手の気持ちに気付いて共感することがコミュニケーションで何よりも大切に気付いた。実習最終日 A さんは最後に「あなたと一緒に歌えて、お話しできて本当に良かった。辛い入院生活がこんなに楽しくなると思わなかった。どんな強い薬よりもあなたといるときが一番痛くなかった。同じ時間を過ごしてくれてありがとう。」と涙を流し、私の手を強く握った。三年生の実習にして、看護として、人として大切なことを学んだ。この実習で感じたことを忘れずに、倦まず弛まず患者さんと関わっていくことを誓った。

## 医歯薬出版賞

### 母からの課題

今から約二年前、私は祖母を亡くした。施設に入所していた祖母が肺炎で入院し、そのまま息を引き取るまでは、わずか五日であった。それまで大きな病気をしてこなかった人であったため、入院してから四日目に、病院から祖母の容体が良くないという連絡を受けた際は我が耳を疑った。母と共に病院へ行くと、祖母の呼吸は荒く、酸素マスクを着けていたにも関わらず非常に苦しそうであった。そのまま看護師から麻薬の使用についての説明と意思確認を受けた際、母は祖母の顔を見つめたまま「考えます。」とだけ答えていた。そして看護師が部屋を出ると、母は一言「どうしたらいい？」とぼつりと零した。私はその問いに対して、何と答えるべきか悩み、言葉に詰まってしまった。いつも解いている模擬試験だったら『アドバンスディレクティブはありましたか？』なんて選択肢を選べば正解するだろう。しかし、現実には今日の前にいる母親は、そんな答えを求めていないように思えた。「わからないけど、お母さんが決めたならおばあちゃんはわかってくれるよ。」必死に考えた結果、私はそう答えて、続けて先ほどの看護師の説明を含めた、看護に携わる者としての知識と、一人の家族としての思いを、ただ思いつくままに伝えた。その時の私は、どちら側の人間にもなりきれず、中途半端な立ち位置からでしか母の問いかけに答えられなかった。第三者としての冷静な視点でもなく、家族として母や祖母に寄り添った姿勢でもない、そんな取り留めのない話を、母は頷きながらただ聞いていた。そして一時間ほど黙って祖母の顔を見た後、麻薬の使用の意思を看護師に伝えた。麻薬を投与された祖母は呼吸が落ち着き、徐々に弱くなった後、そのまま翌日の早朝に息を引き取った。医師の死亡確認を受けながら、母は「私が死なせたみたい。」と隣で言った。

あの時の母の問いかけに、何と答えるべきだったのか、今でも考えている。あれから看取りの場面に立ち会うことはなかったが、模擬試験や参考書ではいくつものそういった事例について考え、最適だと思われる『対象に寄り添った』答えを出してきた。しかし、どれもあの時の返事として納得できそうなものはなかった。もちろん、対象となる人は全員違う人間なのだから、全員に共通する正しい答えなんてないのだろう。だが、対象を家族のように思って寄り添う姿勢が必要だといわれる度に、あの場面を思い出し、胸が締め付けられる。母のような思いをする遺族がもう二度とないように、どうしたら良いのか考え、実践していくことが、私の看護師としての生涯の課題になるのではないかと思う。

## さわ研究所賞

### 心に寄り添う看護

テレビもネットもコロナのニュースで溢れている中、一枚の写真と出会った。防護服に身を包んだ医師が「家に帰りたい」「妻に会いたい」と涙する 1 人のお年寄りを抱きしめている写真だった。戦場と化した集中治療室で昼夜を問わず治療を続ける医師が患者を包み込むように抱きしめるその姿を目にして、医師と患者という関係を越えた人間の温かさと優しさを感じ、自然と涙が流れた。この写真を見て、自分が目指す看護師像を改めて考えさせられた。

新型コロナウイルスという未知な感染症により、今まで当たり前だった日常が 180 度変わってしまい、当たり前ではなくなった。家族や友人達と過ごす何気ない日常がどれだけ幸せで尊いことだったのかを思い知らされた。

父母の勤める介護施設でも面会は窓越しでしかできず、手を握り、触れ合い、ぬくもりを身近に感じることもすらできないと聞いた。命に終わりが近づいていても、そばで寄り添い、看取ることもできないという。病院や施設に入られている方の心のよりどころは、医療従事者なのかもしれない。治療の場でありながら、同時に求められる心の安らぎの大切さ。ひとことに「看護師」と言っても本当に奥が深く学ぶことが沢山あるように思えた。

新型コロナウイルス感染拡大防止で病院実習から校内実習に変わった。校内実習だからこそ学べたことが沢山あった。しかし、唯一学べなかったことがある。それは、患者さんを思いやる気持ちや共感する気持ちなど、寄り添う看護について学ぶことである。これは、実際に患者さんと触れ合い、患者さんと一番近い場所でコミュニケーションをとることで生まれてくるものだと思う。今私は看護の知識や技術を学ぶことに一生懸命になっている。そんな私は、看護の基本である「看護の心」から少し離れていつている気がする。もちろん、知識と技術も大切である。しかし、一番大切なことは、患者さんに寄り添う心である。そんな気持ちから少し離れている私に、これから医療に携わるものとして、絶対に忘れてはいけないことをこの一枚の写真が教えてくれた気がした。医師がお年寄りを抱きしめるこの写真が全てを物語っているような気がした。

私の看護師像は患者さんの心に寄り添える看護師である。いつかあの医師のように、全てを包み込むような愛と優しさを持った看護師になれるといいなと思った。

この一枚の写真に出逢えて良かった。患者さんを抱きしめる医師の姿は私の心の中に一生残るだろう。

## ありよし たかき 有吉 誉樹

## まえの かのん 前野 花乃